

展覧会の見どころ

熊野古道なかへち美術館

本年度は特別展1回・館藏品展3回の計4展覧会を開催します。

春に開催の草花一雑賀清子の記録からは、熊野の自然に関連した雑賀清子の水彩画および点描作品を紹介いたします。私たちの身の回りの自然と作品とをつないでご覧いただきたい展覧会です。

熊野の元氣—ヤタガラスがやってきた!は夏休みのための特別企画です。熊野の神々の使いとされる「ヤタガラス」をキーワードにして、イマジネーション豊かな世界を展開します。当地在住の番留京子の版画、達哉ムチャチヨの木彫作品などを主に、色彩豊かで躍動感ある作品を紹介いたします。会期中には二種類のワークショップを予定しています。

館藏品展の野長瀬晩花展では、風変わりな異色とされた晩花自身と作品について紹介し、晩花ならではの「異色」の魅力をさぐります。

おなじく館藏品展の凌雲あれこれでは、小作品、各種印刷物、陶磁器や漆器等に窺える意外で楽しい凌雲の側面を紹介したいと思います。

展覧会の見どころ

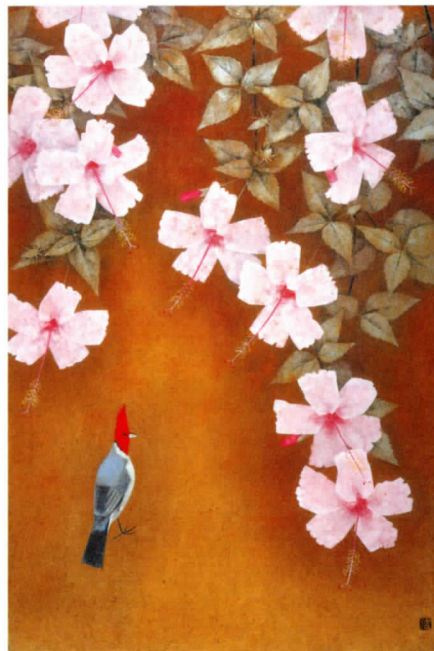
田辺市立美術館

本年度は特別展4回・小企画展1回の計5展覧会を開催します。まず4月から7月にかけて、田辺市の出身で美術研究家・愛好者として類まれなる見識や探究心を発揮した脇村義太郎・禮次郎兄弟が旧蔵していた、文人画から近代絵画に至るコレクション展を開催します。本展覧会は第62回全国植樹祭にご臨席される天皇・皇后両陛下にもご覧いただく予定となっています。8月から秋にかけて開催する現代のクレバス画展は、現代の画家たちによって描かれた近年の作品に焦点をあてて、クレバス画表現の可能性を探ります。秋には版画に見る印象派と題した、19世紀後半から20世紀前半のフランスの版画芸術を印象派の画家たちの作品を中心に紹介する展覧会を開催します。翌年2月から3月にかけては、秀逸な花鳥画の表現によって生涯にわたって京都日本画壇で重きをなした上村松篁の生誕110年を記念した展覧会を開催します。これら特別展の開催に加え、原勝四郎が描いた日本画を紹介する小企画展の開催も予定しています。

展覧会案内('11年4月~'12年3月)

田辺市立美術館 / 熊野古道なかへち美術館

生誕110年 上村松篁展 2012.2.11~3.25



上村松篁《ハイビスカスとカーディナル》1964(昭和39)年 松柏美術館蔵

絵画と出会う「この一点!」

田辺市立美術館

★特別展:脇村義太郎と禮次郎 一珠玉のコレクション

会期:(前期)4月 5日(火)~5月15日(日)
(後期)5月24日(火)~7月 3日(日)

青木木米(1767~1833)は、京都祇園新地の茶屋、木屋に生まれ、幼名は八十八。木米の号は木屋と幼名にちなんでおり、豊米、古器観、停雲楼なども号しました。池大雅とは幼時から親しく、後に大雅の親友である高芙蓉を訪れ、古器物の鑑賞、儒学や篆刻を学びました。大坂の豪商木村兼葎堂のもとで、中国の陶書『陶説』を読み、それに啓発され1796(寛政8)年頃から陶工を志しています。

画面中央の松樹の下を強い風に吹かれ袖を大きく翻している二人の人物が描かれています。「聴濤」とは本来「波濤の音を聞く」の意ですが、本図の図様からもこの場合の「濤」は松音、松風、松濤と解釈できます。落款中の「兼齋君」については、同年に制作された《新緑帯雨図》(出光美術館蔵)の為書にも記されている人物で、儒学者の千手謙齋が橋兼齋ではないかと思われます。本図の款記には「亭雲楼」の文言も見られ、陶工として紀州を訪れていた木米がこの地を離れる際、紀州藩主の治宝から拝領したといわれる「停雲楼」の銀印にちなんだものなのでしょう。脇村禮次郎は自身の文人画コレクションの中でも、重要文化財級といわれている本作品をとりわけ大切にしています。

(主任 辰巳 充)



青木木米《聴濤図》1826(文政9)年 田辺市立美術館寄託(脇村禮次郎旧蔵品) ※5月24日~7月3日の期間展示

田辺市立美術館へのきもち⑤

私は熊野という地につくづくご縁があるようです。小さい頃から、「うちの先祖は熊野から山伏の格好をして岩手まで逃げてきた」ときかされていました。実家の屋号も熊野です。私が初めて熊野を訪れたのは、10年前の春。泊めてもらった山の斜面に立つ古民家には五右衛門風呂、かまど、囲炉裏があり、窓からは翠色の熊野川がゆったり蛇行して流れるのが見えました。まるで時がとまったような熊野の生活と風景は強く印象に残っています。

その後、思いがけず2009年秋、再び熊野に戻ることができました。NPO和歌山芸術文化支援協会主催のアーティスト・イン・レジデンス・プログラム『森のちから3』に招聘され、2ヶ月間、田辺市中辺路町近露に滞在して、地元のみなさんと共同制作した作品を熊野古道沿いに野外展示させていただきました。そして、その滞在制作がきっかけで2010年夏に熊野古道なかへち美術館で実現したのが、私にとって日本では初めての個展『森の記憶』でした。展覧会の直前の2週間は毎日朝から夜遅くまで美術館で展示作業で、まるで美術館に住んでいるような生活でした。ブリツカー賞を受賞した妹島和世さん・西沢立衛さん設計によるひんやりとしたシャープな空間に、対照的に暖かみのある柔らかい質感の羊毛を主な素材とした私の作品を展示させていただいたことはとても光栄です。開催にあたってほんとうにたくさんの方々にご協力いただき、こころから感謝しています。

熊野は日本人のもっとも深いところにある思想の源泉、日本の原風景といわれます。私にとって熊野は故郷のような懐かしさを感じる場所であり、現実の生活とはかけ離れたところにある遠い桃源郷のようなあこがれの地であり、と同時に得体の知れない深い闇のような不気味なところでもありました。そんな熊野に短期間ながら生活し、湧きおこってきた想いを作品として表現することでさらに深く熊野の森に入り込むことができたように思います。それでもまだまだ熊野はよくわからない不思議なところなんです。きっと、いつかまた熊野の森に迷いに戻ってこようと思っています。

(テキストアーティスト 熊澤 明子)



展示作業中(2010年7月12日)

編集後記

展覧会の紹介や活動の報告など、お伝えしたい内容が多くなり、紙面が足りない!と思いつつ編集しています。展覧会スケジュールは、見やすいようにデザインを少し変更してみました。どうぞ切り取ってご活用ください。

今年度も皆様楽しんでいただける展覧会や、ワークショップ等を開催してゆきます。多くの皆様のご来館をお待ちしています。(本館 M.M.)

田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.14

編集・発行:田辺市立美術館 / 熊野古道なかへち美術館

発行年月日:平成23年4月1日

田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきえ町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

熊野古道なかへち美術館

〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

ORANGE

田辺市立美術館NEWS Vol.14



潮隆雄《樹下清韻》 2000(平成12)年 田辺市立美術館蔵

「花シリーズ」一連の作品のこと

私は比叡平という京滋にまたがる比叡山中腹に開かれた団地の一画に住んで30年余りになります。銀閣寺の裏山東にあたる大文字山の高さから比叡山頂寄りの中程に位置するところで、家の50メートル程前の崖を登ると京都御所を眼下に京都市内を一望することが出来ます。

転居直後はまだ家も少なく、夜は星満天に輝き静寂が不気味な程でした。しばらくすると山中を歩きイカリソウを見つけ、そのうちにササユリ、コアジサイ、ハナイカダ、ショウジョウバカマ、イワウチワ、クリンソウ、エイザンスミレ、……ヤブツバキ、クロモジ等にも気付き、冬のさなか雪中に新芽をふくらませ、力漲らせて春を待つ自然の姿に感動しました。その様なことから四季の移ろいや山野草の姿に心惹かれるようになりました。

ある年友人と3人で大台ヶ原を散策し、上北山村北山川の支流をさかのぼった川沿いに外湯のある、大蛇鞍の真下あたりに建つ1軒宿に泊ったことがあります。玄関前の石垣はイワタバコが密生し、その奥はうっそうとした松林でした。翌朝友人の1人が部屋に飛び込んできて、前日に見た伯母峰峠近くの小さな山草店が大事に育てていたクマガイソウ(葉姿のみ)と同じものがある、しかも奇妙な花が咲いているといいます。疑心暗鬼で向かいの林の中に入ると確かにクマガイソウでした。その時はそっと現場を引き上げましたが、実物を自生で初めて見たその時の感激は今も忘れません。後日山草店で入手した芽を自宅庭の片隅に腐葉土を盛って育てると、毎年2~3個の花をつけて咲いてくれました。新芽の姿もおもしろく、観察し写生し

て楽しんでいましたが、広島転勤のため夏越しが難しくなり6~7年で絶やしてしまいました。

《樹下清韻》はそのクマガイソウをモチーフにしています。扇子をたたんだ様な新芽の成長も興味深く、また開いた葉姿もきれいで、題材として選びましたが、緑色に表すと2枚の扇子を合わせた様な葉脈の特徴が活きないため、白の二重織で葉姿の美しさを浮き上がらせて表すことに努め、さらにその葉筋の谷部には蓄光フィラメントを織り込んで、暗闇では葉脈のみが光を放つ試みをしています。薄暗い林中で始めて見た感激に置き換えようとして遊び心を加えたものです。

ヒマラヤ原産の青いケシ(メコノプシス)「天空に咲く花」もまた苗を購入(2年草)し、新芽から育てて10年余は咲かせたでしょうか。キイジョウロウホトギスも知人からいただき、今も庭の木蔭で毎年かろうじて咲いてくれている大好きな花の一つです。牡丹も10株程、椿も10種以上、イワシャジンもまた可憐な花、シラネアオイもしかり。狭い庭がいろいろの草木であふれています。

新芽を見るだけで何の草木か判別出来る程何年も眺め、写生し、描き演し、反古にし、ようやくその中から生まれ出てきたのが一連の「花シリーズ」の作品たちです。(潮 隆雄)

※今回特別に作者の潮隆雄氏より自作についてのご寄稿いただきました。

展覧会スケジュール

義太郎と禮次郎

脇村義太郎(1900~1997)は田辺市名誉市民であった父市太郎の長男として現在の田辺市に生まれ、旧制田辺中学、旧制第三高等学校、東京帝国大学経済学部を卒業後、同大学助教授、教授などを歴任、その間、船員中央労働委員会会長などをはじめとする多くの政府関係機関の役職を務め、戦後復興期における経済関係のプレーンとして活躍しました。その一方で、教育、芸術分野でも財団法人脇村奨学会の役員として人材育成に努め、神奈川県立近代美術館や東京都美術館をはじめとする多くの美術館の運営に関与しました。また、戦後からその大半を過ごした神奈川県神奈川の逗子や鎌倉で多くの文人や画家と交流を深め、自身も作品を収集するなど美術に対する造詣の深さを示しました。こうして集められたコレクションの中には、佐伯祐三をはじめとする近代絵画の秀作が数多く含まれ、そのうちの30余点が当館に寄贈されて所蔵品の核となっています。

脇村禮次郎(1904~1988)も同じく市太郎の次男として田辺市に生まれ、旧制田辺中学、東京商科大学(現在の一橋大学)を経て三菱銀行に入行、その後、第一線を退くまで実業界の重鎮として多年にわたり活躍していました。美術に関しても、実兄の義太郎と同様に早くから関心を持ち、ニューヨーク在勤時には積極的に美術館を巡って展覧会を観覧、帰国後は美術作品の収集にも力を入れ、鎌倉市に在住してからは多くの文人や美術学者、画家たちとも交流を深め、自己の美術鑑識の眼を養っていきました。氏の逝去後、「郷里の田辺市に美術館を」という遺志により、氏が所蔵されていた文人画・日本画のコレクション100余点などを基点とする当館が開館しました。特に氏が収集されてきた池大雅、青木木米をはじめとする近世文人画コレクションには逸品が多く、なかでも南紀文人画(祇園南海・桑山玉洲・野呂介石)コレクションの質の高さは国内有数のものであると言えるでしょう。

本展覧会は、美術研究者・愛好者として類まれなる見識や探究心を発揮した両氏が生前収集した多岐にわたる美術作品を、当館に寄贈または寄託されているコレクションを中心に展示して、二人の卓越した鑑識眼と美術への思いを紹介するものです。

(主任 辰巳 充)



佐伯祐三《リュクサンブール公園》1927(昭和2年) 田辺市立美術館蔵

INFORMATION

★特別展：「脇村義太郎と禮次郎一珠玉のコレクション」

会期／(前期)4月5日(火)~5月15日(日)
(後期)5月24日(火)~7月3日(日)

休館日／月曜日・5月6日(金)
5月16日(月)~5月23日(月)は
展示替のため休館

主催／田辺市立美術館

観覧料／600円(480円)
学生及び18歳未満は無料
※()内は20名以上の団体割引料金

熊野の元気



番留京子《真夏の夜の夢》2010(平成22年) 個人蔵

ヤタガラス(八咫鳥)という言葉をお聞きになったことはあるでしょうか。ヤタガラスは熊野の神々の使いとされ、三本足を持ち、神話では即位前の神武天皇を熊野から大和へと案内したとされている伝説のカラスです。

夏休みの特別企画として、熊野三山(本宮大社・速玉大社・那智大社)と深い関わりのあるこの「ヤタガラス」をキーワードにした展覧会を開催し、熊野を拠点に作品を発表してきた3人のアーティストを紹介します。

番留京子(1960~)は富山県に生まれ、創形美術学校版画科を卒業した後、第54回日本版画協会展での奨励賞受賞を皮切りに国内外で積極的な活動を展開してきました。1992年から千葉県より熊野に移住し、自然の中で得たインスピレーションをもとにした版画及び彫刻作品を発表するようになります。作品には熊野の神話や森、植物や生き物などが色濃く反映されていますが、それらはこれまで主に首都圏や海外で発表されてきました。

達哉ムチャチョの名で知られる澤達哉(1962~)年は岐阜県に生まれ、名古屋芸術大学油彩専攻を卒業して、1991年からメキシコのベラクルス州立大学で1年間木彫を学びました。このことが帰国後の新しい作品の誕生に繋がりました。全関西美術展展の二席や、とよた美術展準大賞の受賞は、独創性豊かな木彫作品が評価されたものです。1994年に一家とともに熊野に移住して以来、ユニークな作品が次々と生まれますが、木彫作品には熊野産ヒノキの丸太を使い、カラフルな彩色を施しているのが特徴です。

澤裕美(1961~)は岐阜県に生まれました。名古屋芸術専門学校グラフィックデザイン科を卒業し、中部一陽会新人賞をはじめとする受賞を重ね、夫澤達哉とともにグループ展や個展で作品を発表してきました。メキシコで同じく木彫を学びますが、彼女の作品は平面に描かれるもので、植物や人物がモチーフに多く登場します。

同世代の3人の作家による版画、平面、彫刻等の表現は、豊かな色彩とパワフルな作品のコラボレーションであると同時に、三人三様の個性が浮き彫りになるものでもあります。館内全体が展示スペースとなります。

会期中には二度に分けて二種類のワークショップの開催も予定しています。
(学芸員 山本 泰代)

INFORMATION

★特別展：「熊野の元気—ヤタガラスがやってきた!」

会期／7月2日(土)~9月4日(日)

休館日／月曜日(ただし7月18日は開館)・7月19日(火)

主催／熊野古道なかへち美術館

観覧料／250円(200円)
学生及び18歳未満は無料
※()内は20名以上の団体割引料金

観覧料変更のお知らせ

当館は近年、若年層の利用が少ない傾向にあり、残念に思っています。若い人たちが気軽に美術館へ来ていただけるよう、本年4月から18歳未満及び学生の方の観覧料を無料とすることにいたしました。

この変更に伴い、一般の方には若干の負担増をお願いするとともに、毎週土曜日に行っていました小中学生及び同伴する保護者・指導者の観覧料無料の取扱いも終了いたします。何卒ご理解をお願い申し上げます。

なお、65歳以上の方や、身体障害者手帳等をお持ちの方への減免制度につきましては、現行どおりです(半額)。

少しでも美術館を利用していただく方が増えますよう、引き続き取り組んで参りたいと思いますので、今後ともご意見などご遠慮なくお寄せください。

(館長 井口 富夫)

変更前			変更後		
館蔵品展 (小企画展)	一般	210円(160円)	→	館蔵品展 (小企画展)	250円(200円)
	高校生 大学生	150円(120円)		特別展	その都度定める
	小学生 中学生	100円(70円)		18歳未満 学生	無料
特別展	その都度定める				

※18歳未満及び学生の方は、年齢確認のできるもの又は学生証を受付で提示してください。
※()内は20名以上の団体割引料金です。

田辺市立美術館

H.23	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H.24	1月	2月	3月
①特別展 脇村義太郎と禮次郎 —珠玉のコレクション— (前期)4/ 5(火)~5/15(日) (後期)5/24(火)~7/ 3(日) 展示替のため休館 5/16(月)~5/23(月)				展示替のため休館	②特別展 現代のクレパス画 8/2(火)~10/2(日)		展示替のため休館 10/15(土)~11/20(日)	③特別展 版画に見る印象派 展示替のため休館	④小企画展 原勝四郎の日本画 12/3(土)~1/29(日) 年末年始休館 12/28(水)~1/4(水)			展示替のため休館	⑤特別展 生誕110年 上村松篁展 2/11(土・祝)~ 3/25(日)

熊野古道なかへち美術館

H.23	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H.24	1月	2月	3月
①館蔵品展 草花 —雑賀溝子の記録から 4/16(土)~6/5(日)			展示替のため休館	②特別展 熊野の元気 —ヤタガラスがやってきた! 7/2(土)~9/4(日)		※美術館開放講座 展示替のため休館	③館蔵品展 野長瀬晩花展 (前期)10/ 8(土)~11/27(日) (後期)12/10(土)~ 1/22(日)		展示替のため休館 11/28(月)~12/9(金) 年末年始休館 12/28(水)~ 1/4(水)			展示替のため休館	④館蔵品展 凌雲あれこれ —意外作品を楽しむ 2/11(土・祝)~ 3/25(日)

REPORT 美術館開放講座「森の響き—種谷睦子マリンバコンサート」

【日時】9月11日(土)14:00~16:00 【場所】熊野古道なかへち美術館 展示室

昨秋の美術館開放講座ではマリンバの演奏をお楽しみ頂きました。国内外で活躍される種谷睦子さんは、ニューヨークのカーネギーホールでも高評を得た日本を代表するマリンバ奏者の1人です。この日はまずオープニング曲のチゴイネルワイゼンから客席の180人は仰天、種谷さんの卓越したテクニックとパワーに圧倒されつばなしで、アンコールまで一気に駆け抜けるような演奏会になりました。世界に一台というチェロマリンバを囲んでの説明もあり、その夢のような響きを現代曲で披露しても下さいました。種谷さんのユーモアあふれるお話、三船麻理さんの絶妙なキーボード伴奏、また飛び入りの中学生との楽しい競演(?)も出て、充実した2時間でした。
(学芸員 山本 泰代)



マリンバの演奏に聞き入りました

REPORT コスモスマつりに協賛しました

【日時】10月16日(土)・17日(日)10:00~17:00 【場所】新庄総合公園

昨年の秋に新庄総合公園で行われたNPO花つぼみ主催のコスモスマつりに当館も協賛し、会場の一角をお借りして開催中の展覧会(潮隆雄タビスリー—近作展)の期間限定招待券を配布しました。

初めての試みでしたが、このコスモスマつりの2日間で400名以上の方にご来館いただき、中にはブースに「初めて美術館へ入ったけど良かったわー」と声を掛けて来てくださる方もいて、感激しました。美術館へ足を運んでいただく良いきっかけ作りになったのではないかと考えています。

(事務員 松原 麻衣)



親子連れに招待券を渡しています

新収蔵作品の紹介

昨年度はタビスリー作家潮隆雄(1938~)の作品6点を新たに収蔵(購入1点・寄贈5点)し、吉田博(1876~1950)の水彩画1点を購入、原勝四郎(1886~1964)の油彩画1点をご寄贈いただきました。

潮隆雄のタビスリー—5点、《夕嵐—A》(1997年/180×125cm)、《樹下清韻》(2000年/175×128cm)、《春暁熊野》(2005年/170×112cm)、《天空へのいざない》(2006年/170×132cm)、《彩風秋声》(2007年/168×133cm/購入)はすべて昨年9月から11月にかけて開催した「潮隆雄タビスリー—近作展 1990—2010」に出品したもので、いずれも近年の制作を代表する充実した作品です(《樹下清韻》は表紙に図版と潮氏にご寄稿いただいた言葉を掲載しています)。もう1点のご寄贈いただいたタビスリー《水映》(1961年/196×142cm)は日展への初入選作で作家の記念碑的な作品です。ご寄贈はすべて作者ご本人からです。

購入した吉田博の水彩画《溪流》(右図版)は、この画家の卓越した風景表現を伝えてくれます。先記の「タビスリー—近作展」と同時に開催した「水彩画・パステル画コレクション選」で早速に展示、紹介しました。当館の水彩画コレクションに明治期の貴重な作品がまた一つ加わりました。

加えて原勝四郎の油彩画、《江津良の海》(1951年/53.1×65.1cm)をこの2月から3月にかけて開催した「原勝四郎展」にあわせて田辺市内のご所蔵家からご惠贈いただきました。1997年に開催した前回の「原勝四郎展」の折には、図版をポスターに使わせていただいた作品で、原の資性をよく示す風景画の秀作です。

近年、当館の展覧会と作品収集の活動とはうまく結びついて進展しているように思います。今後も継続できるよう努めたいと思います。

(学芸員 三谷 渉)



吉田博《溪流》1910(明治43)年 68.0×50.7cm